

ヤマトサンショウウオ *Hynobius vandenburghi* Dunn

【選定理由】

本種は止水産卵性のサンショウウオで、渥美、知多、尾張、西三河地方の丘陵部に生息するが、過去に知られている繁殖地の多くが既に消失しており、現在残っている産地にも消滅の危機に瀕している地点が多いため、絶滅危惧 I B 類と評価された。

【形態】

体の表面は黄褐色から黒褐色。暗褐色の小さな斑点を密布している。尾の上縁に黄褐色条を有するが、これを欠くものもある。前肢は4本、後肢は5本の指を持ち、肋条は13。鋤骨歯列はV字型。

【分布の概要】

日本固有種。本県より西の東海地方から、近畿地方まで分布する。基準産地は奈良県。本県下では渥美、知多半島及び名古屋市北部から豊田市・瀬戸市にかけての丘陵部に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

湧水のある湿地の止水に早春に産卵する。通常は年内に変態して上陸し、周辺の雑木林、や竹林の林床で昆虫などの小動物を捕食して生活する。産卵期は知多、渥美半島では1月下旬から2月上旬だが、名古屋市内では2月末から3月末にかけて(藤谷, 2000)。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては県下の丘陵地の湿地周辺において広く生息していたが、土地改良事業や耕作放棄などで生息地が破壊され、減少の一途をたどっている。渥美、知多半島では既知の産地の多くが既に消滅しており、残る集団においても特に具体的な保全策は取られていないため、きわめて危機的な状況にある。名古屋市周辺の産地では、個体数のモニタリングや保全活動が行われている地点が多く、一定の成果を挙げているが、それでもいったん減少した個体群を増加させることは容易ではない。外来生物のアライグマやアメリカザリガニによる捕食も懸念される。また、本種のミトコンドリア DNA の遺伝的変異を解析した藤谷他(2016)によれば、豊田市や名古屋市においては、遺伝的多様性が著しく低下した集団があり、集団遺伝学的な観点からも存続が危ぶまれている。

【保全上の留意点】

産卵から変態までの安定した水域の確保が必要である。また、変態後には上陸して、付近の雑木林や竹林で生活するため、こうした繁殖場周辺の林地を十分確保する必要がある。

【特記事項】

愛知県産の本種は、従来カスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* として扱われてきたが、Matsui et al. (2019) による細分化により、この種とされてきた本州産の集団はいくつかの種に分割された。本県産の集団は、その中で中部及び近畿に分布する系統群に属し、学名としては1923年に奈良県を基準産地として記載された *H. vandenburghi* の名が復活することとなった。本種の中で知多半島から瀬戸市、名古屋市にかけての地域には、近畿地方、岐阜県、及び渥美半島の集団とは異なる遺伝子型を持った集団が知られており(藤谷他, 2016)、今後の詳細な検討が必要である。

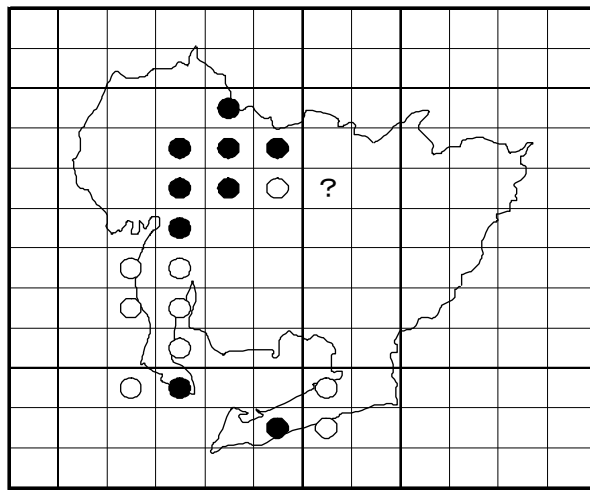
【引用文献】

- M. Matsui, H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology* 38(1): 32-90.
藤谷武史・能登原盛弘・熊澤慶伯, 2016. ミトコンドリア DNA 塩基配列を用いた名古屋市及び周辺地域におけるカスミサンショウウオの遺伝的多様性の研究. *爬虫両棲類学会報* 2016 (1): 1-12.
藤谷武史, 2000. 名古屋市東山公園におけるトウキョウサンショウウオの調査. *両生類誌* (4): 9-12.



南知多町, 2012年2月19日, 島田知彦 撮影

県内分布図



(島田知彦)